

談話室

百聞は一見にしかず

Seeing is Believing

古瀬 智裕*

Furse Tomohiro

今年の一月のコンファレンスで発表した、資源の地域分布を考慮した、アジア地域の多地域・長期エネルギー需給モデルで第四回茅奨励賞をいただいた。私がアジア地域のエネルギー、環境問題に興味を持ったのは大学二年生の時に、ベトナムを旅行した時であった。

当時、これからはアジアの時代であるという話を耳にする機会が多かったのであるが、私がアジアと聞いて思い浮かぶことは、貧困、危険、戦争などの漠然としたネガティブなイメージのみであった。どういう人たちがどのような生活をしているのかといったことなどは、何一つとして思い浮かばなかった。それならば、“百聞は一見にしかず”ということ、遊び半分ではあったが、リュックを背負ってハノイからメコンデルタまで縦断することにした。

鉄道、バス、バイクを使って移動したのであるが、鉄道は車より遅く、道路は穴ぼこだらけ、停電もほとんど毎日のおき、日本で生活していれば思いもよらない光景ばかりであった。しかしながら、ホーチミンを訪れたときは、洪水のような日本製のバイクの群れに圧倒され、また、建設ラッシュで日本のゼネコンがビルを建てているのを目の当たりにすると、著しい経済発展をしていることを肌で感じる事ができた。

このまま経済発展が続き、開発が全国に広がれば、エネルギーや環境に対して大きな影響がでるのではないかとその時感じた。また、日本の企業がベトナムをはじめアジアの環境問題に深く関わっているのではないかとこのことを思い、アジアのエネルギー・環境問題に興味を持つこととなった。

先日、会社の研修で石川県の能登半島の志賀町に行く機会があった。志賀町の主な産業は農業（稲作・スイカ・畜産）であるが、若い人達は金沢や関西方面に出て行くために、地域によっては過疎化が進み、生産者は年々減少しているとのことであった。

そのような志賀町には、志賀原子力発電所がある。平成5年7月から一号機（出力54万kW 沸騰水型軽水炉）が稼動している。原子力発電所の立地により、電気代が安くなり、光熱費を削減できるだけでなく、その廃熱を利用することで、アワビやヒラメの養殖を行うことが可能となっていた。また、補助金で公共施設を充実させることができ、さらに、発電所の建設のために労働者が流れ込み、稼いだ賃金を志賀町に還元していった結果、一時的ではあるが、経済が潤い、町が活気づいたとのことであった。志賀町の人達は、この原子力の立地で得られた恩恵を“原子力バブル”と呼んでいた。現在、二号機（出力134万kW 改良型沸騰軽水炉）の建設や、RDF発電の建設を計画している。

志賀町での原子力発電所の立地の受け入れに関しては、すべてではないにしろ、町興しといった意味合いが含まれている。町の方の中には、都会の者のために我々ががまんをしているといったことをおっしゃる方もおられたが、結局、原子力発電所の恩恵を受けていることも事実である。町民の方から直にこのような話を聞くことで、都市に暮らす私の生活と、志賀町での生活との接点が妙に生々しいものを感じられ、今まで他人様の様に聞こえていた原子力発電の立地に関して、私にも直結する話であると、その時始めて実感した。

頭では分かっているけど、本当に理解しているかどうかとなると、体験してみないと分からないことは多い。今回の会社での研修を通じて、特に学生や若手の研究者にとっては、研究室や研究所以外で、実際に、さまざまなものに触れてみるということは、大切なことであると改めて感じた。そのことは、研究者というスタンスに幅を与え、結局、エネルギー・環境問題の分野の発展にも繋がっていくことになると思う。

エネルギー・資源学会で、学生や若手研究者を対象とした実体験ツアーなるものを企画して、体験討論会などを開いてみてはどうだろうか。“百聞は一見にしかず”といったタイトルで、

* 農中証券(株)業務管理部

〒101-0047 東京都千代田区内神田1-1-12